

創作 童話 「二匹のかへる」

中 村 楠 雄

昔々それは大昔のお話です。その大昔にも寒い  
 く冬があつて、それからそろそろ暖かい春が参  
 りました。丁度其頃田舎の田圃の中で、お父さん  
 と、お母さんの二匹の蛙が土の中から、ヒョック  
 り出て來ました。

そして二匹とも田圃の水溜りでお顔をくるく  
 と洗ひました。

「あゝあ、春だく私達の嬉しい春だ」

とお父さん蛙が言ひながら、大きな息をブウツと  
 お空の方へ吹きました。

お母さん蛙も

「あれ、暖かいお水が小川の中を一つばいに流れ

てゐます。田圃にもお水が澤山溜つてきましたね  
 え」

と申します。

「を、さうく、緑の草も奇麗にふき出して來  
 てゐるよ」

とお父さん蛙が元氣な聲でお答致します。

「あれく、お空でヒバリも鳴いてゐますよ。ホ  
 ラく奇麗なお花も咲いてゐますこと。早く私達  
 のお家もたてませうよ」

とまたお母さん蛙が申しました。

それから二匹の蛙さんが仲よくセツセと働いて奇  
 麗なく、可愛いくお家をたてました。

其の中にお母さん蛙は、卵を澤山生みました。其の卵を大切にしておくと、また澤山のおたまちやくしが出来ました。其のまたおたまちやくしはいつの間にか小さな蛙さんになつてゐました。

ところがオヤ／＼どうしたと云ふのでせう、澤山の子供蛙の中に二匹だけ、變な蛙さんがゐますよ。二匹ともお父さんにも、お母さんにも似ないお體の色をしてゐます。一匹の方は緑色へ黒い點々のついた様な色をしてゐます。一匹の方はうす黒い土色をしてゐます。

その土色の蛙さんは、お體の色は美しい事はありませんけれども、大變やさしくて、よいお言葉をつかひます。それに緑色の蛙さんは、お體の色は奇麗ですけれども、やんちゃでそれに本當にきたない悪いお言葉ばかり使ひます。

お父さんもお母さんも、この緑の蛙さんには困つてしまひます。よいお言葉を使ふ様に、やさし

くする様にと何べん言ひ聞せてもちつともお言附を守りません。

其の中にあちらでも、こちらでも、土の中からムクムクと親がへるが這ひ出して來ました。そしてどの蛙さんのお家にもやつぱり小さな子供蛙さんが澤山出來ました。そこへ丁度蛙さんの幼稚園が始まりました。それでこの緑色の蛙さんと土色の蛙さんも、ほかの蛙さん達といつしよに幼稚園へ行く事になりました。

幼稚園へ行つても緑色の蛙さんはちつともよいお言葉を使ひません。そして自分の體が大きいものですから、ほかの小さい方をいぢめたりして面白がります。他の人のお名まへを呼ぶ時にも

「誰々さん」  
と言はずに

「誰々」  
といつて呼びすてにしたり致します。

土色蛙さんは幼稚園へ来て、よいお言葉をつかつて、皆んなにやさしく致します。それで幼稚園の先生も

「緑色の蛙ちゃん、よいお言葉を使ひませうね、土色がへるさんの様にやさしく致しませうね」

と度々おつしやいます。けれどもいつもだまつてお返事も致しません。

或日幼稚園で帽子取りを致しました。先生も子供も皆んなで致しました。子供達は男の子も、女の子も、みんな赤と白とに分れて帽子をかむりました。先生も赤と白とに分れましたが、先生はタスキを肩からわきへななめにかけてゐられます。先生のは其のタスキをほどけばよいのです。

「ビリビリビリッ」

と云ふ笛の合圖で戦争が始まりました。

「ウワアツ」

と鬨の聲をあげて両方から攻め寄せました。それ

からは追つて行つたり、逃げ戻つたり、あちらでもこちらでも

「キアツ、キアツ」

「アレー」

「アツとられた」

「ウワア」

などと云ふ聲が、ひつきりなしに聞えます。

向ふでは先生どうしつかまへ合つてゐます。そこへ赤と白との子供がどちらからも助けに走つていきます。こちらでは白の先生が、赤の子供達に追はれて逃げてゐます。今戦争の眞最中です。

そんな間にも緑の蛙さんの

「コラッ」

「アイツツ」

と云ふ様な聲がよく聞えます。

また

「緑の蛙さん、そんなお言葉でいゝの」

とおつしやる先生のお言葉も時々聞えます。

其のうちに帽子取りはおしまひになりました。

赤も白も同じ様に二回勝ちました。それでどちら  
も

「萬歳」

を致しました。

そして幼稚園から歸つて來ても、緑色の蛙さんは直ぐに泥田の中へ飛んで行つて、おいたばかりしてゐます。土色の蛙さんは谷川の奇麗なお水の流れてゐる所へ行つて、お友達とお唱歌など歌つてお遊びを致します。

ところが或日曜日的事了。緑色の蛙さんは

「土色のかへる、今日は日曜日だから、あのお宮のそばのお池へ遊びに行かう。あそこへ行つて水泳をしよう」  
と申します。

「あゝ行きませう。そして水泳するの面白いねえ」

「サア行かう」

「サア行ませう」

と二人は出かけました。

そしてとう／＼お池へ着きました。そこで二匹は水泳の競争を致しました。二匹は水の上へならんで浮びました。緑色の蛙さんは

「サア僕ヨイ、トンと言ふよ、遅れちや駄目だよ」

「ヨイ、トン」

二匹は向ふのお池の樋の所まで、一生懸命に泳ぎました。土色蛙さんもそれは／＼一生懸命に泳ぎましたがとう／＼緑色蛙さんに負けました。さうすると緑色蛙さんは大力み、

「ヘン、どんなものだい、僕は殿様のやうにえらいのだぞ、先生にはめて貰つても、土色がへる駄目だなあ、土色蛙の弱虫やい」

なんて悪口を始めました。其の時

「アレ／＼アレ」

お空から

「フワ〜〜」

と、紫色がかつた、緑色がかつた、黄色がかつた  
紅色がかつた、雲の様なものが、舞ひ降りて來ま  
した。

それがお池の上まで來ると、紫も、緑も、黄も

紅もみんな

「ススス〜」

と色がこくなつて、そして奇麗なく、ピカ〜  
光つたおべべになりました。

「あ〜、おべべが出來た、奇麗だなあ」

と思つてゐるうちに、ニコ〜とお笑ひになつた  
奇麗な女の方のお顔があらはれました。

「私はそこのお宮の神様であるぞ、緑色の蛙、お  
前は殿様のやうにえらいのだと言つて力んでゐる  
が、名は何と云ふのでありますか、殿様がへると  
云ふのかね」

とお尋ねになりました。けれども緑色の蛙は

「知らんわい」

と口の中でつぶやきながら、お返事もしませんでした。

「あ〜、これ〜こんどは土色の蛙」

とおつしやつたので

「ハイ」

と土色の蛙は、きれいに確かなお返事を致しまし  
た。

「よくお返事が出來ました。あなたはいつちもよい  
お言葉をつかつて、そして大變お友達にも優しく  
致しますから、一つ今日はい〜ものをあげませう」  
と神様はおつしやつて、持つてゐられたお鞆をバ  
チンと開いて、中から小さな金色の玉を、お取り  
出しになりました。

「土色の蛙、これをお飲み、これを飲むと大變よ  
いお聲が出ます。お唱歌も一層お上手になります。

サア」

といつて渡して下さいました。それでそれを頂戴してグイツと飲みました。そして

「ありがたうございました」

と申し上げたのですが、

「アア、これは誰の聲か知ら」

と思つて氣づいて見ると、もう土色蛙さんは大變よいお聲になつてゐました。嬉しくつて嬉しくつてたまらないので、にこ／＼しながら神様のお顔を見ますと、神様もにこ／＼していらつしやいました。

「そして土色蛙、お前の名は何といひますか」

とまたお尋ねになりましたので、

「私は土色蛙のほかにはありません」

と申し上げると、

「よし／＼それならよい名もつけてあげませう。

お前は**大變**かしこいからかじかといつたらよいで

せう」

と申されました。それでまた

「ありがたうございます」

といつてから、おつむをあげて見ると、もう神様のお姿はありませんでした。

それでこのとき神様のおつしやつたお言葉から緑色に黒茶色の點々のある蛙に、殿様がへると云ふ名がついたのださうです。そしてこの時神様に金色の小さい玉を頂く事が出来なかつたから、今でも泥田の中を飛び廻りながら、グワア／＼グワ／＼と、やかましく鳴いてゐるのださうです。

この時の神様のお言葉で、谷川のきれいなお水の中に住んでゐる土色蛙に、かじかと云ふお名まへがついたのださうです。そしてこの時神様からあの金色の玉を頂いて飲んだので、今でもかじかは體の色こそ土色ですけれどもあんな可愛い、奇麗な聲で鳴く事が出来るやうになつたのださうです。適當な繪とふさはしい態度とを混じり用ひる事は、このお話を生かすに特に大切な要件だと思ひます。(昭和、一一、二二〇、)